

全国で「つながる！」を増やす チャレンジ助成

2022年12月 こども宅食応援団・
フローレンスこども宅食普及チーム

まずはじめに

助成活動実施するにあたり・・・

こども宅食応援団(とフローレンス普及チーム)の悩み

新しく出会う団体さんから「家庭に行って、ごはんやおやつを届けば、それは『こども宅食』と言えますよね？」

「子どもの貧困を解決するために、食糧を配る活動ですよね？」

それだけではない、食料支援は活動の一部なんだ・・・

ただ、まだ全国に活動があまり知られていないので、

なかなか伝わりづらい。そんなモヤモヤが募っています。

今年6月、皆さんとはエリアミーティングで目指す活動をこのような図で話しました

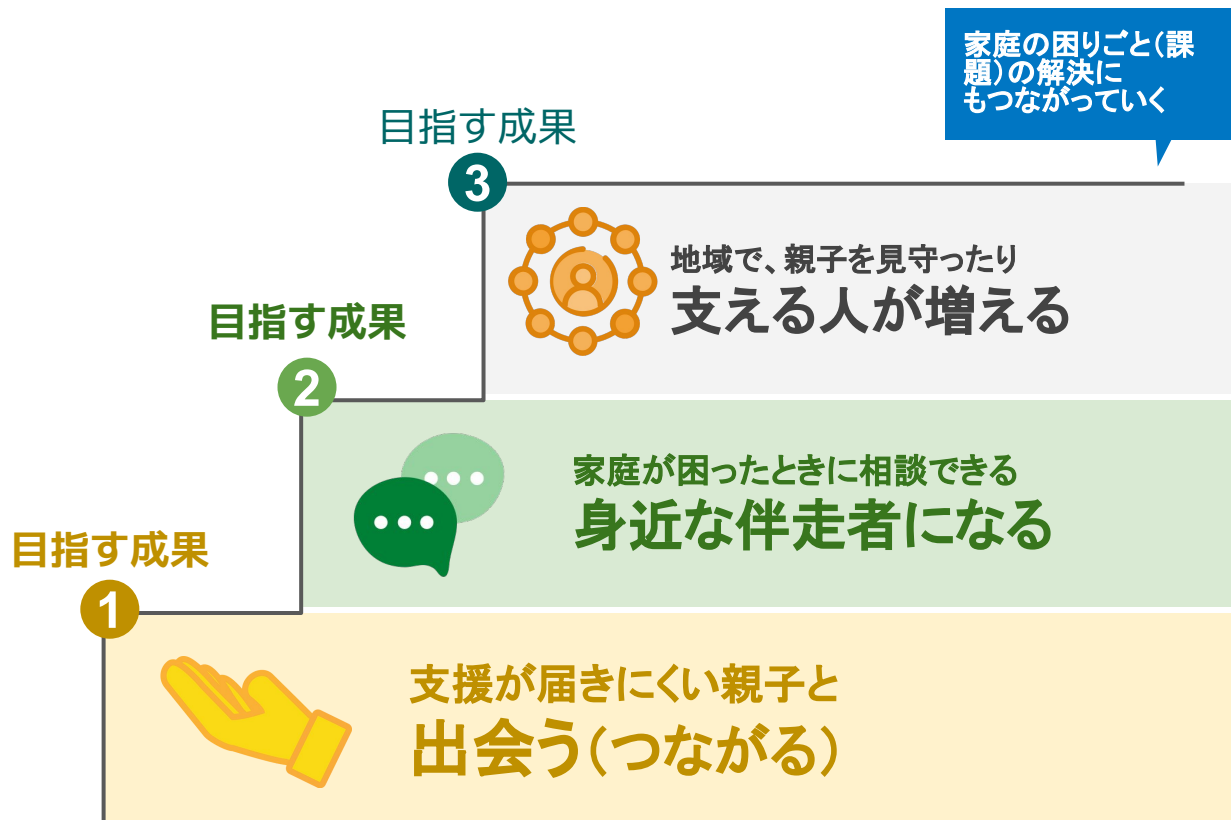
宅食で目指すもの=つな^{がる}+つな^{げる}

親子の抱える経済的困窮をこども宅食“だけ”で解決するのは厳しい。

(もちろん一部、一時的には改善するものの)。「こども宅食」では、
つな^{がり}にくい親子につな^{がる}ためのアクションをとり(=アウトリーチ)、
他の必要な支援や、人とのつな^{がり}を増やしていく



今回助成事業を実施するに当たり、目指す成果(目指す変化)を、もう少し具体的にしました。



ボランティア団体から社協や専門機関など、
「こども宅食」を活用する全国の団体の主たる活動や体制は、幅広く多様ですが、
どの事業でも目指したい共通の成果は①②です。

point
1

全国の事業で
共通で
目指す成果



①②の積み重ねの先に、
最終的にたどり着く
ゴール

（※実施者の体制や、地域
連携の構築状況による）

家庭と接点を持ち、見守る手段は来所での実施などさまざまありますが、こども宅食応援団としては、物理的にこちらから出向「届ける」支援ツールの良さを広め、全国の地域でこの取組みが増えるようにしていきたいと考えています。(後で詳細を説明します。)



point
2



「届ける」支援ツールで
支援が届きにくい親子と出会う！



事業の詳細登録をお願いします🙏(第2回全国実態調査の位置付けです)

具体的には、地域で実施している**100以上の多様な事業**について、

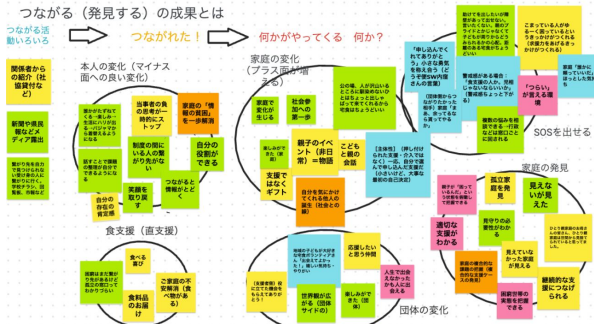
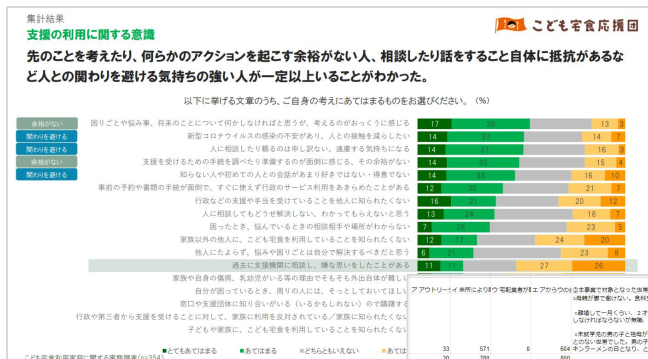
1. こども宅食を通じ、どのような家庭につながろうとしているのか、どのようなことを実現しようとしているのか、**各実施者の皆さんの思いや目指すことを教えてもらう**
2. そのために、どのような**体制や取り組みの工夫**をしているか、取り組みの課題など、**実態と特徴を把握する**

これにより

次のような応援団の活動について来年度以降の方針に活かしたいと思います：

- 新しい地域での、新規事業の立ち上げをサポートする **事例集やノウハウ**にしてい
- 悩みや課題を相談したり、似たようなゴールを目指している **団体同士が出会えるコミュニティ**をつくる・増やす
- 研修・座談会の企画や、その他の **伴走支援メニュー**を考える
- 体制・事業の持続性等についての **課題を分析し、国・行政への政策提言**につなげる

こうした整理・言語化できたのは、全国調査、資金助成事業など実施報告・ご意見、広報記事にもした事業ヒアリングなどを通じて、皆さんから事業の実態・ご家庭の実態を教えて頂いたおかげです。



隠れている地域課題を見つけ、地域で解決できる環境づくりを——鹿児島県南さつま市でしおて・おとどけ便

2022.12.16

各地の取り組み



子どもたちの笑顔を守るために——奈良
県奈良市 元気ごはん宅食

2022.10.05

各地の取り組み



今回の助成事業は、「いまの地域に足りないものを、
みんなで考えて作っていく」という、最初から答えが
無い問いを一緒に考えていく仲間（実施者の皆さん）と出会い、協
働していく事業だと考えています
（できればワクワクして）。

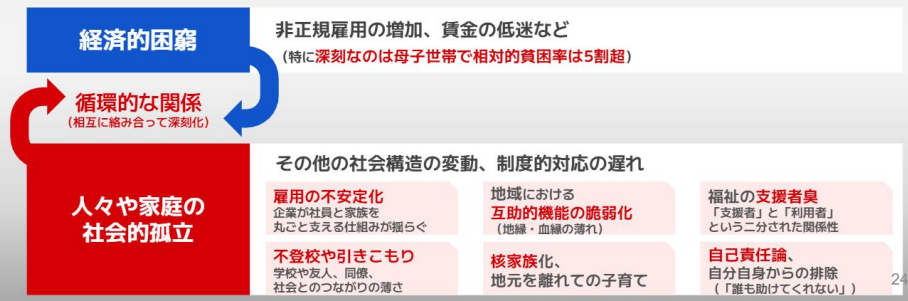
1.「こども宅食を何のためにやるのか？」

**つながりたい親子の状態・そうした親子が
置かれている状況から考える**

対象世帯の置かれている状況や、そうした状況が起きてしまう社会構造については、エリアミーティングでも「社会的な孤立と経済困窮が互いに絡み合って深刻化されている」ことや、「支援や相談に辿り着くまでの様々な障壁」について共有しました。

親子が置かれている社会の構造

先行する議論や研究では、“社会的な孤立”と経済的困窮が互いに絡み合って深刻化することが指摘されている。“社会的な孤立”は、社会構造の変動や制度的対応の遅れなどの要因から生じ、「困っているなら援助を求めればよい」とはいかない。



支援や相談を阻む、様々な障害

これらの障害を乗り越えた人だけが、支援を受けられる構造にある



経済的困窮

それ自体も非常に重大な課題なのですが…

日本の子どもの**7人に1人**が

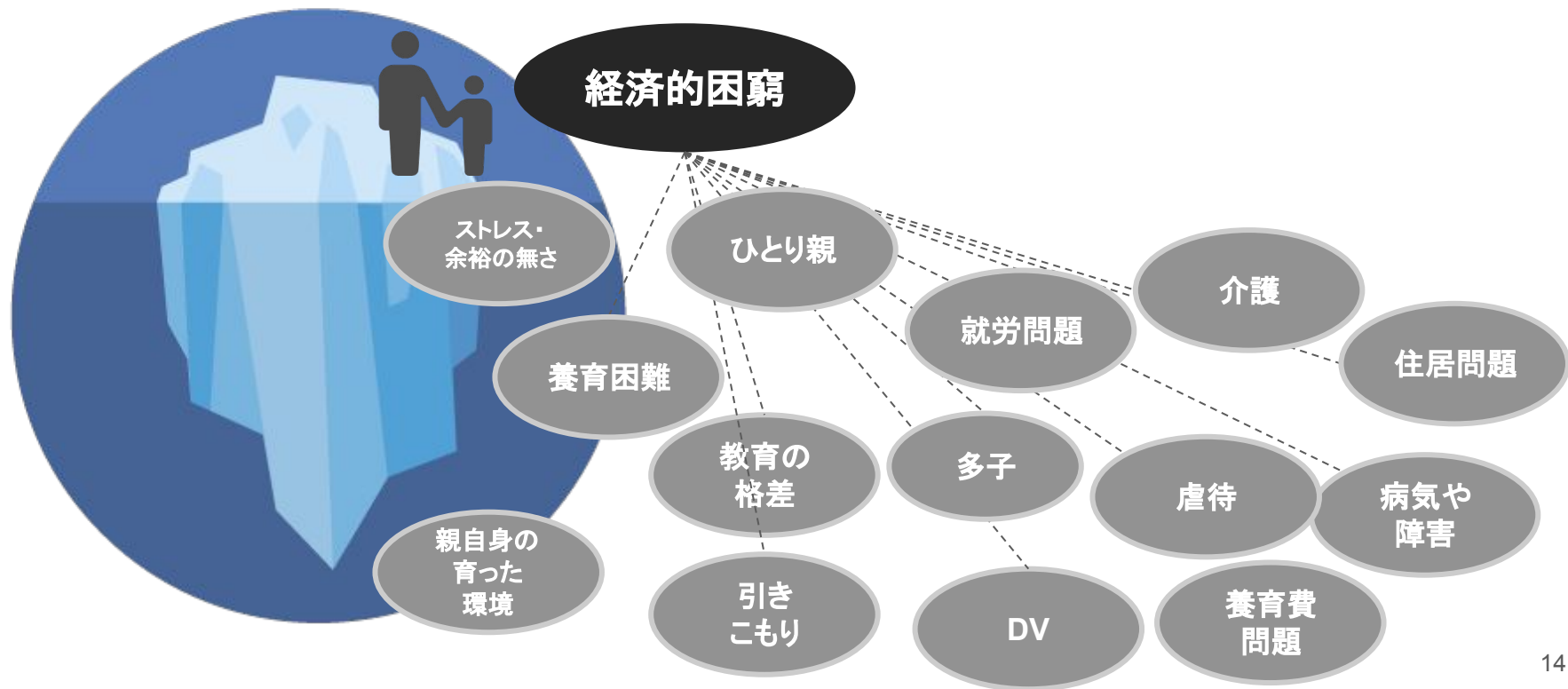
相対的貧困

その国の文化水準、生活水準と比較して困窮した状態。
等価可処分所得※の中央値の半分(貧困線)に満たない世帯。

日本の場合、等価可処分所得**122万円以下**が相対的貧困世帯。

※世帯の可処分所得を世帯人員の平方根で割って調整した所得

「経済的困窮」は **氷山の一角** にしか過ぎず、見えていない様々な困りごと(課題)が絡み合って存在している可能性がある。そうした事例を多く見て、聞いてきました。



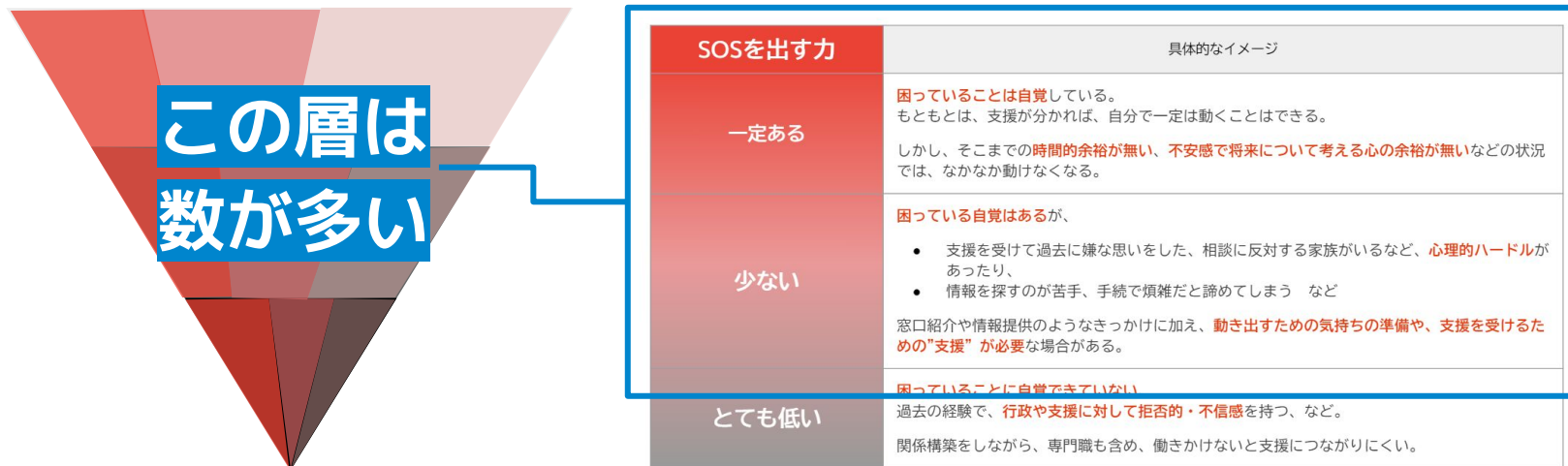
同時に、家庭の**SOSを出す力(援助希求力)**が、支援の届きにくさ・つながりにくさに影響する、ということも重要です



全国の「こども宅食」の活動から、親子の状態が見えてきた**SOSを出す力(援助希求力)**

SOSを出す力	具体的なイメージ
一定ある	<p>困っていることは自覚している。 もともとは、支援が分かれば、自分で一定は動くことはできる。</p> <p>しかし、そこまでの時間的余裕が無い、不安感で将来について考える心の余裕が無いなどの状況では、なかなか動けなくなる。</p>
少ない	<p>困っている自覚はあるが、</p> <ul style="list-style-type: none">● 支援を受けて過去に嫌な思いをした、相談に反対する家族がいるなど、心理的ハードルがあったり、● 情報を探すのが苦手、手続きで煩雑だと諦めてしまう など <p>窓口紹介や情報提供のようなきっかけに加え、動き出すための気持ちの準備や、支援を受けるための”支援”が必要な場合がある。</p>
とても低い	<p>困っていることに自覚できていない、 過去の経験で、行政や支援に対して拒否的・不信感を持つ、など。</p> <p>関係構築をしながら、専門職も含め、働きかけないと支援につながりにくい。</p>

- あなたも、わたしも、誰しもあり得る
 - SOSを出す力は「ある・無し」ではなく人により様々で、グラデーション
 - また、**特別なことではなく**、家計悪化や孤立した子育てなどでストレスが増えるなど環境の変化や、支援に関する過去のネガティブな経験により、SOSを出す力が下がってしまうことも。
- 虐待などの**「ものすごく大変な家庭」だけでなく**、グラデーションのなかで「SOSを出す力が高くない、環境の変化があって弱まっている状態」の人がおり、その数は比較すると多い。
 - とすると、**専門職だけがアウトリーチをするのでは足りず**、地域や社会で、さまざまな層の親子にもつながる人や団体が増えることが重要。（＝地域共生社会の目指すもの）



あらためて「どんな家庭とつながりたいか？」を考える

①「経済的な困窮」にあり、かつ、②「SOSを出す力が高くない」親子のための活動が、いま地域に必要なのでは？

エリアミーティングで話したような **社会の構造** を考えると

親子の状況①

顕在化した **経済的困窮**



かつ

親子の状況②

SOSを出す力が高くない (孤立しやすい・状況悪化しやすい)



2.「こども宅食を何のためにやるのか？」

地域で生み出したい "変化" (成果)

とそのため の 仕組み・工夫

あつし



チャレンジ1

支援が届きにくい親子と
出会う(つながる)

まず出会う（申し込んでもらう）ための仕組みとは？

全事業共通

要素① 経済的な困窮に顕れるような**困りごとがある人にとって、ちょうど助かるものがもらえる**（＝申込みの誘引）

要素② 困りごとを**周囲に知られたくない人でも抵抗感が低い**

要素③ 本人が**支援を受けに場に出てこれないケースでも利用できる**

食品など生活必需品
をフックにする

こちらから
自宅に届ける



さらに…

要素④ 情報を探すのが苦手・困っている自覚していない場合でも、こども宅食の**案内情報が届く**



保健師・SSW・社協などと連携したチラシ配布や声掛けなど、
情報を届ける活動の強化

要素⑤ 手続きが苦手だったり、時間や心の余裕も無くても申し込める（＝**申込み手続の時点で離脱しない**）

・WebやLINEを活用し、24時間受付
・分かりやすい申込みフォーム



一人で課題を抱え込む親子にも...「食」は万人に効く強力なフック



三股町社会福祉協議会 松崎亮さん

—こども宅食の良さをどう分析しますか？

いきなり深刻な相談はハードルが高い人や、根本的な問題を本人が認識していない場合、相談・支援の窓口で待っていても出会えない。

一方で、**「無料なら食品がほしい」というSOSは比較的どんな人でも出しやすい。**

援助希求力が弱い人でもつながりやすいのがこども宅食です。

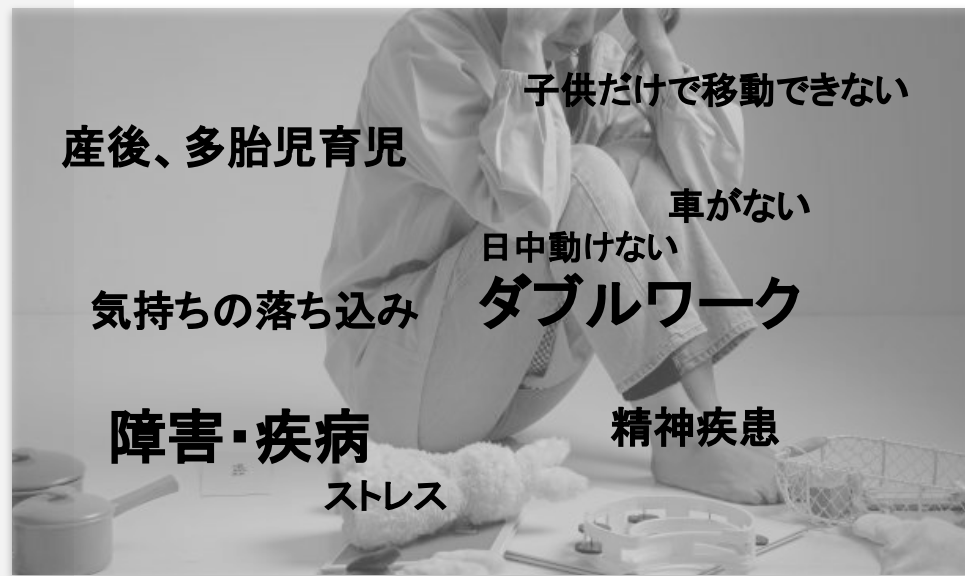
「届ける」支援ツールを活用してもらいたい理由：
支援を受けに物理的に場に出てこれない親子がどの地域にも必ず存在するから

過去調査※：約3,000世帯のうち、444世帯・約14%

「外出が困難になるような障害・
疾病がある」と回答



※n=3,173家庭(2021年8月の神戸こども宅食に申込んだ家庭)



事業登録フォームで質問(ヒアリング調査)していること

周知方法	<input type="checkbox"/> 行政などと連携し、対象世帯・潜在的な対象世帯に直接案内 <input type="checkbox"/> 行政や社協、地域団体、民生委員から気になる家庭に紹介してもらう <input type="checkbox"/> 専用のWebサイト、SNSを開設 <input type="checkbox"/> 保育園・公民館・市役所など対象者が立ち寄りそうな場所にチラシを置く <input type="checkbox"/> 地方紙(新聞)やラジオ <input type="checkbox"/> 県民だより・市民だより、全住民向け冊子(暮らしの便利帳など)に掲載 <input type="checkbox"/> 事業は非公開で実施している
(心理的なハードル) 支援を受けることへの偏見(スティグマ)や拒否感があるご家庭への配慮	<input type="checkbox"/> チラシやWebは、利用層の目線で親しみやすいデザイン・色合いなどを取り入れている <input type="checkbox"/> 「貧困」「要支援」といった表現を避ける・極力配慮している <input type="checkbox"/> その他
(支援を受けるための手続きの煩雑さ) 申込み時に利用家庭が離脱しないための工夫	<input type="checkbox"/> LINEなどオンラインでどこからでも・24時間申し込める <input type="checkbox"/> 時間がない・難しい手続きが苦手な人でも申し込める簡易な入力項目にしている <input type="checkbox"/> その他
(課題の自己認知) 本人が「困り感」を感じていない場合のアプローチ	【チェックボックス(複数選択可)】 <input type="checkbox"/> 自団体以外に、申込みを案内してくれる団体や連携先がいる <input type="checkbox"/> その他
支援世帯数(ユニーク数)	①対面訪問により支援している世帯 ②宅配便を活用して支援している世帯 ③来所型で支援している世帯 ※要件：③来所型のみではなく①②も取り入れていること(P.46へ)

いうち

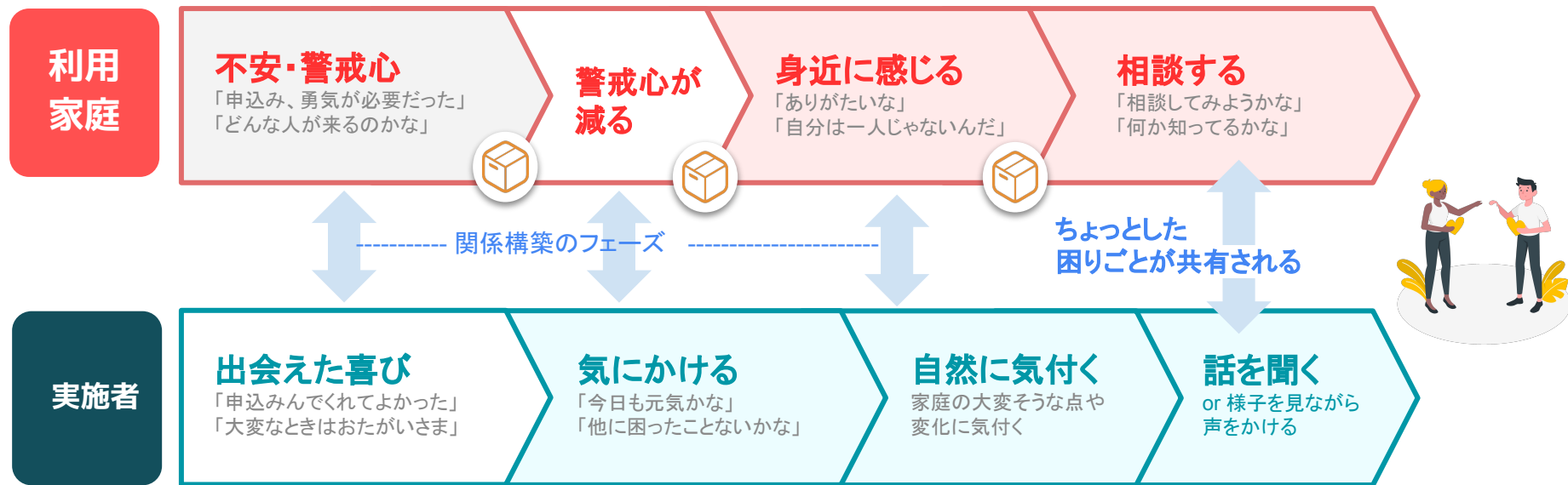


チャレンジ2

**家庭が困ったときに相談できる
身近な伴走者になる**

本人も実施者も影響し合って変化する：

「困ったときに相談できる」上下関係のない身近な伴走者になる

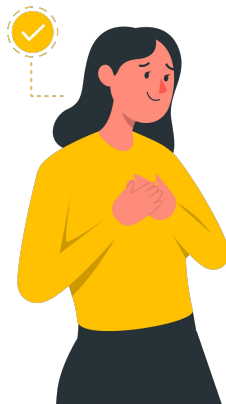


「本人のSOSを出す力が上がる」イメージ

利用ハードルを下げた結果、
こども宅食の申込み自体が
最初の成功体験になる
(=小さなSOSを出せた経験)



定期的に声をかけ、気にかけて
くれる人の存在を知って、
「1人ではないんだ」と孤立感が
軽減したり、安心感が生まれる。

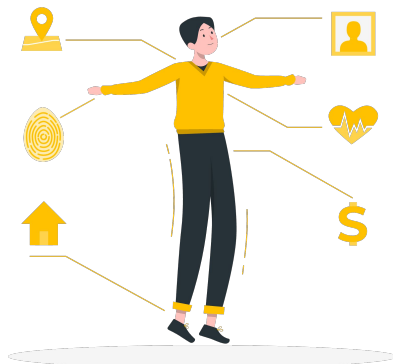


ちょっとした悩みごとを一緒に
考えてくれる人ができ、
「もう少し行動してみよう」など
前向きな心理変化が生まれる。



身近な伴走者になる

家庭の状況や困りごと、変化を
自然に（無理なく）
周囲が知る・気づくことができる。



「おたがいさま」の精神で、
「困ったときに相談できる」
上下関係のない身近な存在になる。
（まずは団体自身が家庭を気にかける存在になる）



◆対面訪問型のこども宅食がツールとして使いやすい点（まとめ）

	単発	 定期的		
▼活動（アプローチ） の各ステップ	食品配送 +相談	対面訪問型の 見守り活動 （食品等あり）	対面訪問型の 見守り活動 （食品・家事支援無し）	定期的な 来所型の活動 （食品あり）
接点を持つ 周囲に知られたくない人	対応できる	対応できる	対応できる	個室などを準備するなど 工夫が必要
接点を持つ 物理的に場に出てこれない人				対象外になる
関係構築 単純接触効果（何度も会う）や 場の安心感（プライバシー）	単発だと 難易度高い	構築し易くなる ・自宅（安心な場所） ・特に同じ人が訪問する	し易くなる ※同左	比較的し易い ・顔見知りのスタッフ ・個室などなら場の安心感も
関係構築 自然な接点、喜ばれる接点	単発だと 難易度高い	構築し易くなる ・喜ばれる食品等	難易度やや高い 訪問自体が喜ばれる 関係になっている場合など	し易くなる ・喜ばれる食品等
家庭の状況や困りごと、 変化を自然に（無理なく） 周囲が知る・気づく	難易度が高い 非言語情報が限られる （本人の説明が頼り）	顔色や服装だけでなく、 家の様子など 非言語情報が多い ので気づきやすい	非言語情報が多い ※同左	難易度が高い 非言語情報は顔色や 服装などに限られる （大部分は本人の説明が頼り）

特に、対面訪問は、家の様子・子どもの表情などの**非言語情報が自然と入る（強み）**

見守り強化事業（XX便） 訪問時チェックリスト

利用者名（ ）	訪問日 令和 年 月 日	訪問者（ ）
項目	チェック内容	<input checked="" type="checkbox"/>
お届け状況	自宅で手渡し	
	事務所で手渡し	
住まいの状況	きれい	
	ふつう	
子どもの状況	散らかっている	
	不自然な怪我やアザ	
	体調不良（病気の治療中）	
	表情が乏しい	
	極端に無口	
	大人の顔色を窺っている	
	親への近づき方、距離感が不自然	
保護者の状況	服装、身だしなみ（不衛生な状況）	
	体調不良（病気の治療中）	
	表情が乏しい	
	極端に無口	
	感情や態度が変化しやすい	
自由記述	余裕がないように見える	
	子どもへの近づき方、距離感が不自然	

ある社協での宅食で、ボランティアが
使っているチェックリスト

各地の実際の事例



不登校の子ども。物資を届けに行った際には顔を見せてくれ、自分の好きな食べ物が入っているか、物資が入っている袋の中を嬉しそうに見ている姿があった。受験についても話すことができた。



実際に訪問してみると、元々の養育力の低さや母の病氣、コロナによる収入減により食事にかける優先順位が下がっており、一日1食食べられたら良い方。
家の中も混沌としており、とても子どもが安心・安全に暮らせる環境とは言い難い状況でした。



お母さん自身が体調不良になり仕事を辞め、自宅で仕事をしていたが不安定な状態であり、宅食がとても助かったと言われていた。
現在は就職も決まり、**子どもたちの表情が以前より明るくなっていた。**



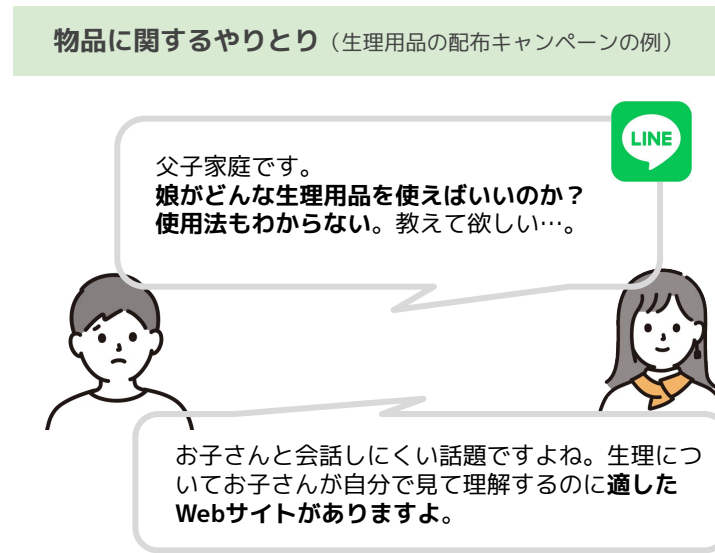
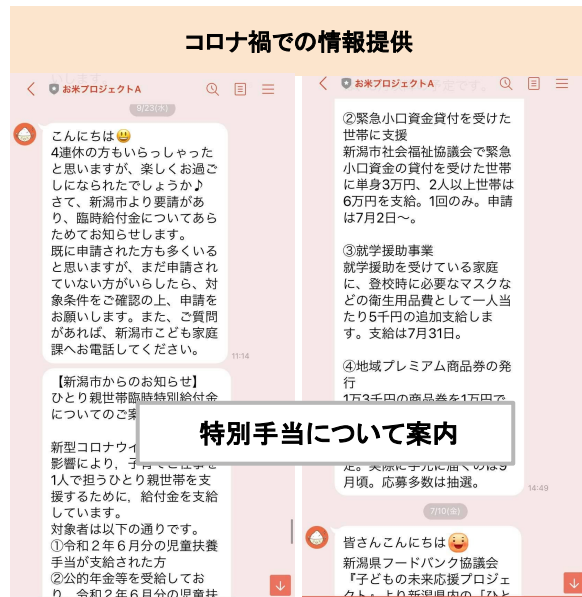
コロナ禍、母親が職場を解雇され家庭にずっと居ること。公営団地の**あまり広くない住居に、親子3人が時間を共有**することが多くなり**（1人は不登校で在宅）煮詰まり状態**になりました。

(補足) 宅配便活用の皆さんに今回チャレンジ頂きたいこと

◆(活動要件として)取り入れる工夫:

家庭の状況や、困りごとに自然に話すきっかけが生まれることを促すため、

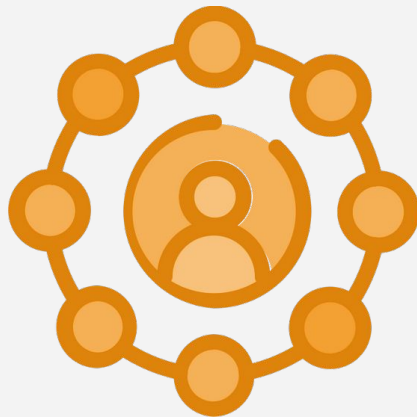
- ❑ LINE等で、気軽な・なるべく双方向のコミュニケーションを定期的に行う
- ❑ 地域の相談窓口や子育て支援イベントの情報など利用家庭の参考になりそうな情報を提供する(目安:月1回程度)



事業登録フォームで質問(ヒアリング調査)していること

活動要件（必須）	<ul style="list-style-type: none"> 活動は単発支援ではなく、最低でも6ヶ月以上家庭と接点を持ち支援することを想定していますか。
活動要件（必須）	<ul style="list-style-type: none"> 世帯について、利用家庭の氏名、住所、世帯構成等、活動に必要な家庭の情報を記載した支援家庭リストを作成していますか。
家庭の状況について確認しているポイント	<input type="checkbox"/> 子どもの様子 <input type="checkbox"/> 親御さんの様子 <input type="checkbox"/> 食事の状況 <input type="checkbox"/> 家の内外の様子 <input type="checkbox"/> 近くで助けてくれる存在（親族・友人など）の有無 <input type="checkbox"/> 地域の民間団体とのつながり <input type="checkbox"/> 行政とのつながり <input type="checkbox"/> その他
経済的課題以外の利用家庭のニーズ／課題の把握手段	<input type="checkbox"/> 申込時の家庭状況ヒアリング <input type="checkbox"/> 申込時以外のアンケート／調査票によるヒアリング <input type="checkbox"/> 配送時のコミュニケーション <input type="checkbox"/> 配送時とは別に定期的に会話する時間を設定 <input type="checkbox"/> 連携する行政／専門機関からの情報提供 <input type="checkbox"/> 関係する民間団体との情報共有 <input type="checkbox"/> 特に把握していない"

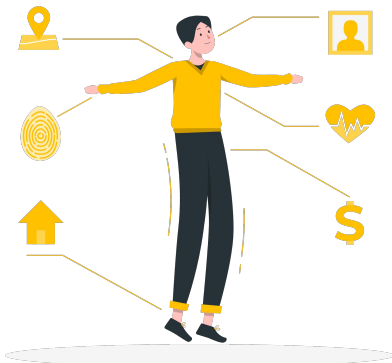
ゆなし
→いうち？



チャレンジ3
地域で、親子を見守ったり
支える人が増える

利用家庭の身近な伴走者になる

家庭の状況や困りごと、変化を
自然に（無理なく）
周囲が知る・気づくことができる。



「おたがいさま」の精神で、
「困ったときに相談できる」
上下関係のない身近な存在になる。
（まずは団体自身が家庭を気に
かける存在になる）



地域で、親子を見守ったり 支える人が増える

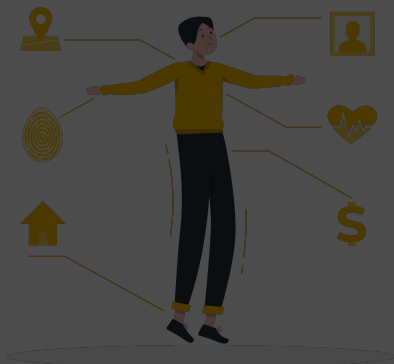
家庭の困りごとを何とかするため
地域の社会資源や人にもつなげてい
く。結果、地域で家庭を気にかける
人、一緒に見守る人が増えていく。



気にかける周囲の人が増える

ための仕組み

家庭の状況や困りごと、変化を
自然に（無理なく）
周囲が知る・気づくことができる。



「おたがいさま」の精神で、
「困ったときに相談できる」
上下関係のない身近な存在になる。
（まずは団体自身が家庭を気にかける存在になる）



How?

家庭の困りごとを何とかするため
地域の社会資源や人にもつなげていく。結果、地域で家庭を気にかける人、一緒に見守る人が増えていく。



具体的に

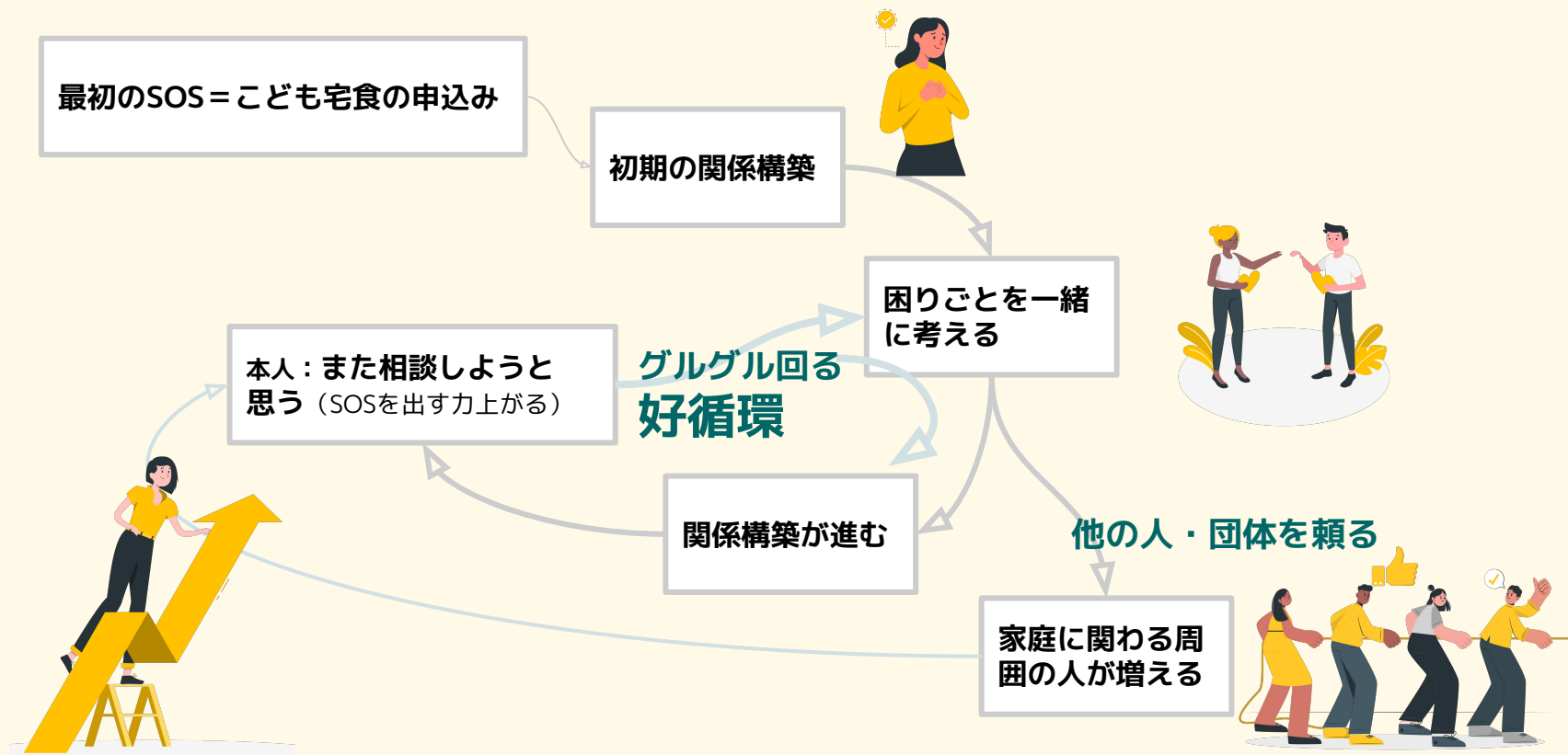
経済的困窮以外にも
他の困りごとが本人と実施者の
間で共有されるようになる

- ・ 本人と一緒に考える
- ・ 情報を探して提供する
- ・ 周りに呼びかける など

地域で家庭を見守る・
支える人が増える



一步一步の積み上げが好循環に



ゆくゆくは、**どんな人も、困ったら「おたがいさま」で**
声をかけ合える人間関係に囲まれる地域、社会



あなたも、私も...長い一生のなかで、一回も困る場面が無い人はいない！

❑ 私達（こども宅食応援団）が、“こども宅食の枠内”では目指していないこと

- ❑ 届けて終わり（食支援）だけ
- ❑ 経済的困窮を直接に解決すること（←食支援だけでは実現不可能。専門機関につなげることが重要）
- ❑ 丁寧な関係構築や、利用者目線が伴わない行為・活動

❑ 私達（こども宅食応援団）が、増やそうとしてる人・団体

❑ 家庭の身近な伴走者になること（必ずしも専門職・有資格者でなくてもよい）

- ❖ 家庭の抱える困りごとを本人側から安心して相談される関係になる
- ❖ 本人と一緒に「じゃあ、どうしようか？」を考えながら、自分たちがいまできることや、必要な情報や他に頼る先を探す など

❑ 身近な伴走者を目指すと自然と 他団体・人と連携する

利用家庭のためにも、団体自身で全て解決しようとせず、他の団体を頼る・SOSを出す。チームになって活動をする

少し"派生した"事業…
手法を組み合わせた事業について

当然ですが、

(訪問対面型の)こども宅食も万能なツールではありません

対面訪問型のこども宅食の課題

- **つながれる世帯数が限定的**

訪問に非常に人手がかかるのでリーチできる規模（世帯数）が限定的になる。

※人口の多い都市部は特に悩む。「日程調整や人手の確保などは来所支援と比べかなり大変」という声も出る。

- **訪問移動の負担**

「家庭が来所できないからこちらから出向く」ということは、裏を返すと、宅食の訪問スタッフに負荷がかかっている。（時間やガソリン代など）

※北海道など面積が広大な場合、離島や山間部の家庭へのリーチ、宅配に使える車が少ない都市部は特に。

- **対面訪問を望まない家庭には使えない**

導入した地域からは、①いきなりの自宅訪問には抵抗感がある、②支援に反対する配偶者等が自宅におり話にくい、③自宅を知られたくない（DV被害者など）といったさまざまな理由が聞かれた。

- **一定の体制は必要**

民間団体でも実施しやすい一方で、密室でのトラブルや、家庭が話したくないことまで宅食ボランティアが踏み込んで聞いてしまう等も起こりうる。研修等が必要。

ツールとして導入・活用の難易度が高くない
対面型こども宅食（一定の課題はあるが）

担い手の裾野を広げるため、（専門職がいるか、過去実績があるか、などの）要件はあまり上げずに資金助成などを行う

1

対面訪問型のメリット・デメリットも踏まえ、
「支援が届きにくい世帯の特性に合ったつながり方・見守り体制の構築」を目指す場合に、
来所型などとの手法と組み合わせた活動をモデル的事業の実施としてサポート

2

対面訪問型のメリット・デメリットも踏まえ、
宅配便型の活動は、「事業規模を一定拡大する」、「対面コミュニケーションに代り、見守りにデジタルも活用」などにチャレンジしており、
モデル的事業の実施としてサポート

夏の助成事業報告から
見えてきた！！

対面訪問型のこども宅食の課題

- **つながれる世帯数が限定的**
訪問に非常に人手がかかるのでリーチできる規模（世帯数）が限定的になる。
※人口の多い都市部は特に悩む。「日程調整や人手の確保などは来所支援と比べかなり大変」という声も出る。
- **訪問移動の負担**
「家庭が来所できないからこちらから出向く」ということは、裏を返すと、宅食の訪問スタッフに負担がかかっている。（時間やガソリン代など）
※北海道など面積が広大な場合、離島や山間部の家庭へのリーチ、宅配に使える車が少ない都市部は特に。
- **対面訪問を望まない家庭には使えない**
導入した地域からは、①いきなりの自宅訪問には抵抗感がある、②支援に反対する配偶者等が自宅におり話しにくい、③自宅を知られたくない（DV被害者など）といったさまざまな理由が聞かれた。
- **一定の体制は必要**
民間団体でも実施しやすい一方で、密室でのトラブルや、家庭が話したくないことまで宅食ボランティアが踏み込んで聞いてしまう等も起こりうる。研修等が必要。

したがって、来所型メインの事業・宅配便活用の皆さんについては、

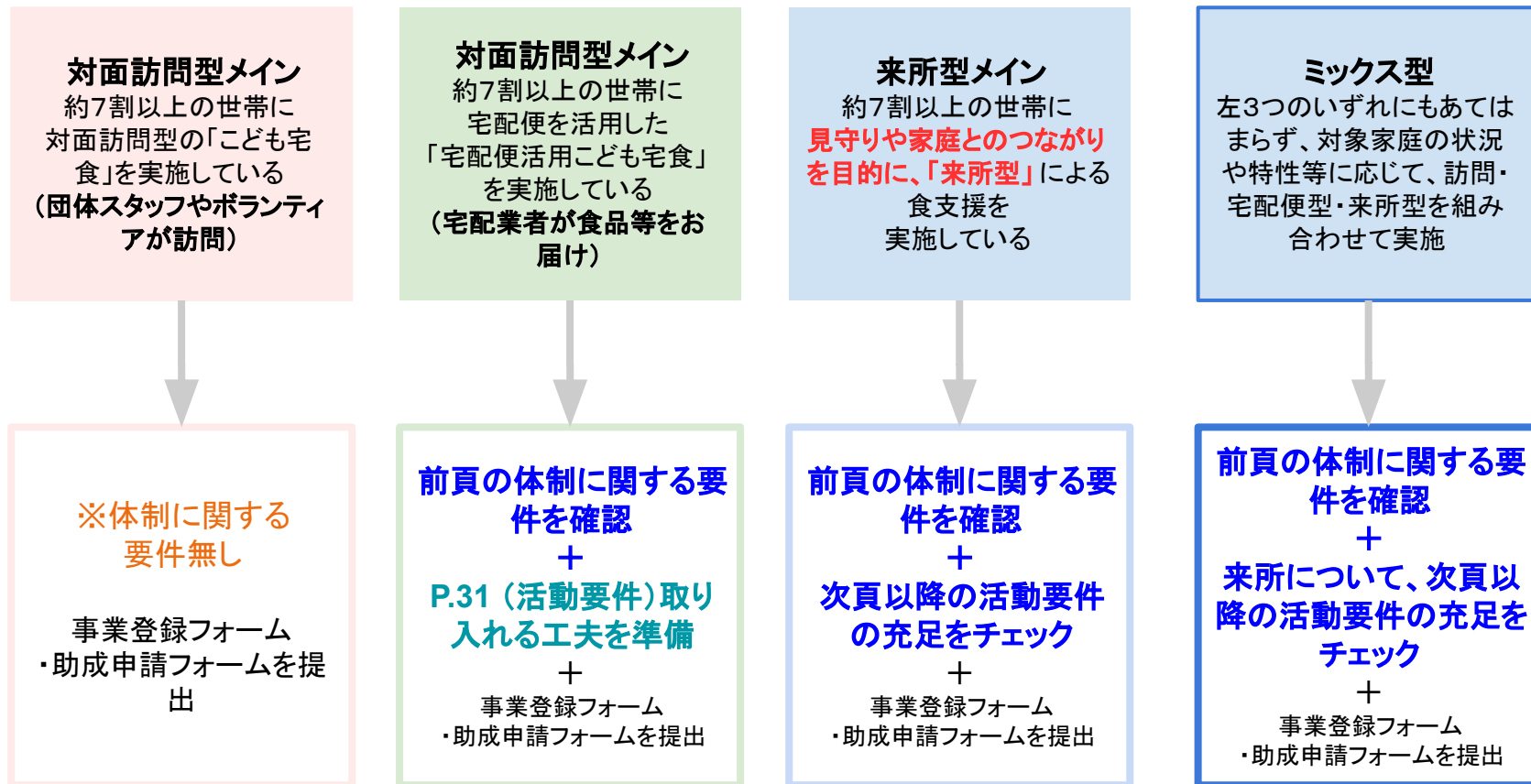
モデル的事業の実施として、体制についての一定の条件を充足して頂くことをお願いします。

(※助成事業は一般公募のため新規団体も一定ネットワークに加盟申請してきます。私達としても事業を十分に理解したメンバーを置くなど伴走体制の整備が必要となり、一気に急増するとすぐに対応できないためです…。)

具体的には以下の3要件です：

- 経済的困難以外に様々な課題を持つ家庭に対し、必要な支援を提供する又は必要な支援につなげる体制があること
 - もともと相談支援事業を行っている組織であるため、自団体で対応できる
 - 対応するためのつなぎ先の確保・つなぐ手順を準備できている
- 本事業の対象家庭すべてについて、他機関との連携や定期的なアンケート等により、経済的な課題以外にも家庭の状況を把握し記録していること
- 利用家庭についてきめ細かな支援が必要と考えられる場合は、訪問面談や個別ヒアリングなどの必要な対応を行う体制がありますか？
※専門機関等と連携して実施する場合も含む

◆セルフチェックシート



まとめ：支援が届きにくい親子と出会う(つながる)仕組みとして
来所型支援を主として活用する場合(1／2枚目)

(1)前提条件：

- ❑ 活動は、食品等の提供をツールにし、定期的な接点を確保する目的 であること
**例えば、「学習支援等で既に接点がある・見守りができている子どもに、
帰りに食品を渡す」等の活動は、通常の食支援とし、今回登録・助成対象の
「つながる・見守る目的の活動」とは区別します。**

- ❑ **一部の必要な家庭には、訪問型(対面または宅配便) のこども宅食を実施する
(P.23ご参照)**

様々な事情で外出が困難、移動手段の制限等により物理的に支援を受けるハードルがある家庭はどの地域にも必ずおり、そうした世帯を取りこぼさないためです。

▶▶「どのような家庭に訪問型を活用するのか？(”ここぞ”の利用)」等の工夫についても、
全国でのノウハウ蓄積のためヒアリングさせてください。

事業登録フォーム：「利用家庭の状況に応じて複数の方法を組み合わせる(来所型と訪問型など)という支援について、具体的にどのような運用をされていますか。どのような家庭にどのような方法を使う、など具体的に記載してください。」

まとめ：支援が届きにくい親子と出会う(つながる)仕組みとして
来所型支援を主として活用する場合(1／2枚目)

(2)活動要件：

来所・パントリーなど自宅以外での接点を持つ場合、

- **ア.「困窮する人が来る会場」などのスティグマを防ぐため、対象家庭のみに場所・時間を知らせている(＝会員制の会場・引渡し場所である)**
※「誰でも来てよい」(スティグマ軽減のため)という会場の場合、P.18の通り「困窮や生活課題」を把握している世帯のみが世帯数調査・助成の対象になります。
- **イ. 移動手段の制限等により物理的に支援を受けるハードルがある家庭への配慮**
 - ✓ 自宅や駅から近い、又は無料・安価な駐車場が併設されている会場などを選ぶ
 - ✓ 土日や平日の場合も夕方など、仕事のある人でも来所しやすい曜日・時間設定をしている(※参考資料)
- **ウ.「人とのコミュニケーションが苦手」など、心理的障壁がある家庭でも行きたくなるような雰囲気づくりの工夫をしている**